

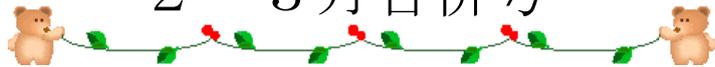
月刊

書字文化

～日本書字文化協会機関紙 No42～

平成 29 年

2・3 月合併号



一般社団法人日本書字文化協会機関誌

代表理事・会長 大平恵理

〒164-0001 中野区中野 2-13-26 第一岡ビル 3 階

電話 03-6304-8212 FAX 03-6304-8213

E メール info@syobunkyo.org



第 5 回全国書写書道伝統文化大会

年賀はがきコン応募が初の 1 万点越え

3 月 5 日、表彰式（東日本橋・中央区立産業会館）

第 5 回伝統文化大会（書文協、文字・活字文化推進機構共催、文部科学省、小・中・高校校長会、全日本書写書道教育研究会後援）は 1 月 20 日に締め切れ、年賀はがきコンクールの応募点数が 10,440 点と初めて 1 万点の大台に乗りました。書き初めは応募点数は 1,203 点でした。毛筆に特化するため今回から硬筆の部をなくしたことから応募点数が減りました。手本と評価の観点が変わった伝統文化大会の書き初め展覧会に多くの方が応募するよう広報に力を入れたと思います。

中央審査会は 1 月 27 日、東京中野の書文協本部で開かれ、特別賞受賞者の表彰式は 3 月 5 日 2 時から、中央区東日本橋「中央区立産業会館」で開催。同時に優秀作品展示会も同所で開かれます。特別賞入賞者一覧は 1 部 300 円（送料込み）で発売します。

「半世紀ぶりの書写書道授業改革」

文字文化軸に書写と書道の“同心円の広がり”を目指す

文部科学省は2月14日、小中学校の学習指導要領の改訂案を発表しました。半世紀ぶりに書写書道授業が大きく変わるのではないかとの歓迎ムードが広がっています。

改訂指導要領は、小学校が2020年度から、中学校が21年度から実施され、高等学校は来年度中に告示し、22年度から学年進行で実施の予定となっています。指導要領の文章的にはチラリと芽をのぞかせただけとも言えますが、書写（小中学校）、書道（高校）を円が広がるようなつながりで一本化した授業改革になる兆しと期待されており、1968（昭和43）年に毛筆が小学3年生以上に必修として位置付けられて以来の大改革になるのでは、と見られています。書写と書道が分かれているように見える公教育の現状が悩みですが、この一本化の改革機運が国民的運動につながるよう書文協も貢献したいと思います。



加藤東陽氏

書文協の中央審査委員（加藤東陽委員長）の先生は書写書道教育の権威がそろっており、今回の学習指導要領改訂は大変注目されるものになりそうだ、との話が交わされました。

雑誌「書道美術新聞」

http://kayahara.com/modules/picalli_news/で同委員の宮澤正明、長野秀章、加藤東陽3氏が昨年末から発表後にかけてリレーエッセーを敢行しました。宮澤、長野両氏は指導要領改訂を審議する中央教育審議会のワーキンググループ委員を務めており、全てはさらけ出せない苦しいエッセーだったと思いますが、エッセーの「文字文化、大きな課題」（宮澤氏）、「届くか?! “94万人の声”」（長野氏）と前進を示唆するものとなっています。



宮澤正明氏

94万人署名とは書写書道教育の充実を求めて1昨年、全日本書写書道教育研究会など6団体が署名運動を展開し94万人署名を文部科学大臣に手渡したことを指しています。その運動を実際に引っ張った書写・書道教育推進協議会で実務者会議の座長を務めた加藤東陽氏は、指導要領改訂案発表後の3回目エッセー「文字文化と学びの連続性」で次のように書いています。

＜換言すれば、両者は同根・同幹として「学びの連続性」が成立することになったもので、この意義は極めて大きいと言わねばならない。われわれの長年の願いが一步前進したと言っても、過言ではないであろう＞

授業の大綱を定めるこの学習指導要領の改訂は現場教師たちの大きな関心事となっており、長野氏は2月14日、世田谷区立中丸小学校で開かれた東京都小学校書道教育研究会で講演し「国民的運動の成果」と改革について語りました。

1つの注目される部分としては次の例があります。書写の指導について新たな1項目が付け加えられました（文科省ホームページの小学国語改訂案から）。

「(エ) 第1学年及び第2学年の(3)のウの(イ)の指導については、適切に運筆する能力の向上につながるよう、指導を工夫すること」

(3)のウの(イ)とは何かというと、次の文章です。

点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。

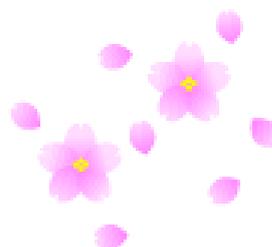
つまり、小学校低学年の書写に「適切に運筆する能力の基礎」を養うことが盛り込まれたのが画期的という事になります。運筆の能力を養うには硬筆（えんぴつ）だけでは無理で、毛筆に限りなく近い指導が小学校低学年でも行われるわけですね。



都小書研で講演する長野氏

ただ、「毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行う事」という項目が生きているので、指導要領に続いて出される指導書では、毛筆と硬筆の間にある軟筆や毛筆に水をつけて特殊マットに書く水筆などにフットライトが当たっているのではないかと見られています。

書文協は改革の方向性について今後具体的に研究していきますので皆様の忌憚ない意見をお気軽にお寄せ下さい。



ろ

書文協会長 大平 恵理

真っ向勝負



第5回全国書写書道伝統文化大会の表彰式が3月5日、東京・東日本橋で開催されます。努力の成果を称えることは大事なことだと思いますが、どうしても勝ち負けを意識しがちなコンクールをどう学習の糧にしていくかは、とても難しいことだと痛感しています。

表彰式では受賞者の代表者が謝辞を述べます。地域、年齢などその受賞者を取り巻く諸事情を勘案して書文協が指名します。受賞者のトップを選ぶのではないのですが「大臣賞はいただいたが謝辞に選ばれないのが残念」という声を何度も聞かされました。コンクールの持つ業の深さを思い知る瞬間です。

最近あるお母さんから「コンクールでも真っ向勝負する精神を子供に教え込みたいので、そのような日頃の鍛え方をしてください」と、お願いされました。この声は私の心を素直に打ちました。真っ向勝負する相手は自分だからです。なまけそうになる気持ち、ひるみそうになる弱い心に打ち勝って、全力を出し切るのです。そして、結果が出たら言い訳なしにそれを受け入れ、次に進む、それが真っ向勝負です。

書文協は、勝ち負けとは関係なく、全ての人に文字を書く楽しさを身に付けてもらい日本語の継承・発展を目指す教育機関を自負しています。コンクールは学びの成果を知るために開催しています。しかし、実は私が願っているのは、やり抜く力、親や指導者ら周りに感謝する思い、そしてなによりも期待されていることを受け止める豊かな心を育むことです。

そうしたことを全部含んだ「真っ向勝負」という言葉は、指導者としての私の背中を押してくれる言葉です。

華やかに孤城先生遺作展開く

死しても孫娘の卒論に残る・・・“ドキュメンタリーとしての孤城”

昨年暮れに亡くなられた書文協顧問、井上孤城（輝夫）先生の遺作展が 2 月 11、12 日、東京都立川市の「なみき画廊」で開かれました。ご遺族がお別れ会を兼ねて企画されたもので、JR 立川駅北口の繁華街にある画廊の 1 階には、現役会長を務めた全日本書写書道教育研究会などからの花スタンドが並び、謹厳実直な孤城先生と対照的な華やかな雰囲気 of 遺作展・お別れ会となりました。書文協からは大平会長、渡邊副会長、谷口専務理事、安井理事が参加し、お別れを告げました。

画廊 1 階には漢字 2 文字などの大作が、2 階には自詠の句詩の書などが飾られました。遺作をお譲りしたいというご遺族のご厚意で「恵風」「蘇（和）顔」の漢字大作と、万葉集を好んだ孤城先生らしい「銀も 金も玉も なにせむに まされるたから 子ににしかめやも」（山上憶良作）の書などをいただきました。この和歌は、書文協音読暗唱教材に選ばれています。

展示会に華を添えたのは孫の武蔵野美術大学 4 年、石井友理さんが担当した「個人を偲ぶコーナー」。

友理さんは卒論で「祖父井上孤城の人生—ドキュメンタリーとしての美術」を製作しました。インスタレーションと呼ばれる空間全体を使った表現手法で祖父を描き卒業制作展に出品しました。そのときに使ったインタビュー映像、油絵やブロンズ像、写真パネルなどを展示したもので(写真)、参加者たちは懐かしい孤城先生に再会できました。

頂いた遺作は折に触れ書文協展示会で掲示の方針です。



きのう

今日

あす

書文協副会長 渡邊 啓子

「今が未来を創る」



「塾がなくなったら時間がありすぎて何をしたらいいかわからない」。受験を終えた中3の女子生徒が言いました。スケジュールを見せてもらったら、下校してすぐに塾が始まり、夜遅くまでの授業が休みなく組まれています。最近の様子を知らない私は「そんな仕組みなんだ・・・」と驚き、共に悩んだ受験期のことを思いました。

「何でその学校に行きたいの?」「ん～ 何だろう・・・」

「面接で志望理由とか聞かれたら何て答えるの?」

「何か、学校に呼ばれている気がする・・・」。何か物足りません。

さらに話しかけていく中で最後に分かったのは、続けてきた書写書道に対するの価値と自信、それを大切にしている気持ちを持っていることでした。結果、時間がない中で、書写書道大会参加をどうしようか悩んだ末に彼女が出した結論は、時間をやりくりして「全部やり遂げる」でした。

こうして彼女は、お母さんの後押しも受けて書文協の大会だけでなく、お正月に行われた日本武道館の席書きにも参加しました。出場時間が何組にも分かれているので付き添いの私は彼女に会えませんでした。しかし、やはり私が教えている小5の弟さんも席書きに出たので、武道館に向かう九段の坂で帰りのお姉さんに会ったそうです。それで「姉さんどうだった?」と聞いたら「凄くニコニコしてたよ」。それを聞いて私は、お正月からとても嬉しく、何かいいことがある予感がしたのを覚えています。

サクラ咲いた彼女。仕事を休んでまでも娘に付き添っていただいたお父さんたちご家族の支援も多大です。まずはおめでとうございます。これからも書写書道を傍らに、日々吸収し、心豊かに感性を磨きながら歩いてほしいと願っています。

東・西・南・北

第 26 回さかえ書道教室書展

神奈川県三浦市で「さかえ書道教室」を開いている栄貴代先生が恒例の書展を2月3日から5日まで、三浦市勤労市民センターで開きました（写真）。地元新聞社や書道連盟、雪舟国際美術協会が後援。今回から書文協も後援に加わりました。

会場には約30点の社中作品がセンスよく展示されたほか、書文協の全国硬筆コンクール出品作31点も展示されました。

開催後、栄先生は図録を兼ねた報告書を関係先に送付されましたが、その中に栄教室が第5回総合大会の全国硬筆コンクールで大健闘したことを伝える地元紙の記事（昨年10月26日付け）がありました。金賞以上に入選した7人の名前が掲載されています。子どもたちの活躍が地元で話題になることはとてもいいことです。



学校・教委顕彰の広がり

書文協では書文協主催の第5回全国書写書道総合大会（締め切り昨年9月17日）について、特別賞入賞者を学校に伝える顕彰依頼を行いました。これを受けて学校や地元教育委員会が児童生徒顕彰の対象にするケースが各地で報告されています。

最近では東京都杉並区が1月19日、区役所会議室で「28年度学校文化栄誉顕彰式」を行いました。同区内の公立、私立の小・中学生から文化行事で優秀な成績をおさめた児童生徒を対象に表彰するもので、書文協の関係では光塩女子学院中等部1年、鮫島世玲菜さんが表彰を受けました。（写真）



教

学

半

教えるは学の半ばなり（書経から）

池田 圭子（書文協教学参与）

水筆に期待



学習指導要領改訂案が発表された2月14日、東京都世田谷区立中丸小学校で開かれた都小学校書写研究会の研究発表会に参加しました。多くの先生方が詰めかけています。学習指導要領改訂で小学校低学年の書写授業が大きく変わりそうだ、という観測が流れ、熱気に溢れていました。

公開授業が終了した後、図書室にて研究発表・協議会。そして指導講評並びに長野秀章先生による講演が行われました。長野先生は、このたびの改訂は、昭和43年の毛筆が小学校3年生以上に必修として位置付けられて以来の大変大きな大改革と力説。低学年の書写も工夫することが求められる、と呼びかけました。

工夫の大きな柱として、水筆の使用があると思います。実は私は「日本の伝統文化に触れさせたい」という幼稚園の要望に応え、正課授業で就学前の幼稚園児に水書き指導を始めて、早二年を迎えようとしています。夏過ぎから年中さんを教え、この夏に墨書による発表会をします。ここまでのいろいろなことを感じつつも、必死でやってきました。この新学習指導要領発表を期に、立ち止まって考えてみると、今、年中児が練習していることひとつとっても、この水書きの重要性を感じます。

現在担当している園児さんは一年という長いスパンで学習出来る為、「つ」「り」「し」と、はらいのある文字を順にやっています。「つ」ではなかなかはらいがうまく出来なかった園児さんも「し」ではほとんどの園児さんがはらえるようになってきました。次回からはよいよ「い」で、はねの学習にはいります。これからも園児さんの書く字が楽しみです。

墨を使う前段としての練習にもなります。注意することで筆の使い方など、ずいぶん慣れてきました。これなら墨で教室を汚すこともないと思います。

水書は小学校の低学年の書写にも新しい風を吹き込むことでしょう。